讀史籍隨見

番外雜書解題

五

69
50
5
東京圖書館
門 類 六十函 架 ロ5 號 カ 冊

番外雜書解題卷之十六

戸田氏德編輯

林道春

經說

周易指掌 六冊 活字板

上名を周易題說といふ假名にて易を解したる書ふり開卷河圖洛書の圖を載て卷末に洛陽本能寺前開板と記せり

書史考異 上卷 刻 冊

易大傳に見ゆる著を數ふるの法は諸子の注釋おほくありといへども大約其指は皆以をもて郭氏辨疑によつて諸子の誤れることどもを考たるよし開卷に書ありとの本撰者の名氏をあらはさず訓點ハ山崎闇齋の加やるところふり

朱易衍義 三卷 三冊 刻

延寶五年丁巳の自序あり朱子か易の事を論したると諸子朱易の事を論

山崎闇齋

したることを諸書の中より抄錄したる書にして往々又みつからの考を註す

仲邨　惕齋

易學啓蒙再攷筆記三冊寫

按するにこの本序跋および編者の名なく卷の前後も詳ならすといへとも卷端の書目によるに性理學の徒啓蒙の集解をふせしものを集め次に惕齋また朱說をあけ自家の說を加えて筆記せしものとみゆ

第一冊　卷端に易學啓蒙筆記と標す三宅尚齋木村重遠等か說をあけしものにしてまゝ解集せし時年號月日を出す

第二冊　卷端に易學啓蒙續筆記と標又三宅尚齋の考ふり末に月日を記す

第三冊　これ惕齋が筆記にして卷端易學啓蒙再巧筆記と題し四書鈔說等の書と同躰にしてまゝ欽按の字をかゝけ己か說を出す　按するに上二冊は尚齋か集解にして惕齋輯錄して標題をなし又たらさるを補續して三冊とふせしものふるへし

易學啓蒙諺解大成四卷四冊刻

榊原　玄輔

天和二年壬戌自跋にはく余嚮講啓蒙之日手錄口義四卷以自便于講說也頃書肆頻來請梓之不復敢隱遂出附之又名曰啓蒙諺解とすへて本文小注ともに一節々々に片假名もて和解したる書ふり　天和四年上木

周易大傳研幾無卷數八冊刻

小倉　三省

周易上經卦ことに變爻を圖し並に象象文言を配し漢字を以て注を下せり

易學折衷一冊刻

井上　純卿

朱子および王陽明の說をあけ本邦伊藤仁齋物徂徠の說をも附して理非を折中せし漢字の記ふり門人原公逸序及寶曆十四年甲申自序あり

易學辨疑一卷一冊刻

同

明和四年丁亥正月自序ありいふ先師熊峯川に從ひ啓蒙を講するを聞くに啓蒙の本經において盡さゝる事あるを忘り諸家の說を考合せてこの記を

作りしよしみゆ

易雋六巻別錄一巻 三冊 刻　　河田幸成

周易の全文を掲け自註を下す別錄ハ古書に見へたる所の易に關る辭並に左傳に載る所卦兆をかゝけ自他の註を施す此書繫辭已下のみ有て巻一より巻の四に至るまてを脫す自序によるに分て兩編とふして布行するか寶曆三年壬午冬十一月望の自序鹽川永錫か跋あり

周易經翼通解十八巻 五冊 刻　　伊藤善韶

明和八年辛卯十一月自序あり善韶か祖父仁齋晩年乾坤及大象を解して古義と名つけ著述あり其後東涯又易を好むて傳義の異同を上禎に掲け其意をひろめしに今父祖の意をうけまた傳義を考へ善韶此書をつくりしものふり巻首に釋例を載す享保十七年壬子十月と志るせり

易原一巻 一冊 刻　　皆川愿

天明六年丙子秋七月自序を按るに愿かつて易六十四卦彖爻の辭のよつて出る所を考究するにみふ名聲の象にしてその言悉く聲象に出るといふ則その說を漢字に記しまた圖解をあらはす五聲十二律内外轉の韻に配するの說極て囂々たり

易象發揮八巻 三冊 寫　　土肥貫雅

易象の文字を類聚す天文地理時候古人人倫鳥獸支體器財光彩食服生植方位數量事態形容虛字復用占辭凡十八門に分ち漢字にて自の解を施す巻首に義則十五條卦の各六十四條をあく又巻ごとに細目を出せり類聚の体たとへハ同人五爻先號咷後笑のごとき共に事態門にして號咷と笑と兩所に出すかゝとし余はおして知るへし

書反正一巻 一冊 刻　　伊藤蘭嵎

尚書堯典一篇にして止む目錄によれは追々に上木すへきものと見へたり

焚書收燼 七冊 刻　　諸葛蠡

書經本文をあけ和漢諸氏の說を分注せし書なり第一巻を附錄とす讀書

摠論及推曆圖自孔子叙書至趙宋興廢世表自唐堯至周武及今歲差圖禹貢輿地圖周武王伐殷月日表及逸書の文を收錄す寛政三年庚戌自序讀例引用先儒姓名引用書目及摠目をのす同年上木

太宰純

朱氏詩傳膏肓二卷二冊刻

朱子の詩傳中の說を陶汰せし書ふり純か志朱子の謬を指摘し其無用の辨を削り諸人の本旨を明すに在りといふ書の名は漢の何邵公か公羊春秋を好て左氏をにくみ左氏膏肓をあらはすの意にふらふるし延享三年丙寅夏五月渡邊操か序に見も卷首讀朱氏詩傳一篇をのす享保十五年庚戌八月の自跋あり今收入重複して二部有

細井德民

詩經古傳十卷四冊刻

寶曆七年丁丑正月自序あり詩經をさくもの古より毛萇を主とす德民かねてより毛傳の安からざるをうたかふ後子貢詩傳一卷を得てこれを讀又漢申培詩說を見るに其書また子貢傳とおふしよつて傳を以て經にかけ其詩の次第八傳に忘たかつてこれをついて又申說を附記して十卷とふすよしゆゑに詩の次第今に同しからす考例七則總篇目等をかく寶曆九年己卯仲冬河寛長崎河寛字仲栗跋あり

藤沼尚景

詩經小識補七卷拾遺一卷合八卷七冊寫

明和七年庚寅九月自序ありこの書は稻葉宣義か號若水あらはせし詩經小識を補ひしものふりこの詩經小識といへる書ハ寶永六年新井白石の需に應して宣義かあめる所ふり毛詩中の草木鳥獸蟲魚等をかゝけ風雅頌を錯綜し註疏を涉獵し且みつから見聞する所とを併せしものふり世の人傳寫して多く索閱に備ふ尚景もかつて家に寫藏せしを庚辰の災に罹りて烏有とふり爾後他本を閲するに傳寫の誤謬すくふからす忘かるにたまゝ善本を得て是を校讐し各家二三の說およひ愚案を附してもつて同志に示し併せて若水の遺意を報し詩經小識補と題するよし自序にみへたり寶永六年己丑十月宣義の自序を載す第一卷艸屬上四十九種第二卷艸屬下

四十七種第三巻木屬六十五種第四巻羽屬四十二種第五巻毛屬三十九種第六巻鱗屬十六種第七巻蟲屬三十種拾遺一巻各種併せて五十七種を雜載す拾遺ハ則尚景撰する所巻尾に明和五年戊子九月六日就稿六たび稿をかへて安永辛丑二月臨寫東都藤沼尚景行甫七十二歳と志るせり此本則尚景か原本ふり

詩經名物集成六巻 五冊 刻　　茅原定

草木鳥獸虫魚六門に分ち凡二百八十一種をあけ古註新註をあらハし一名別名等を辨す享和三年九月自序並凡例　引證書目五百七十五部を出す

詩三說合鮮一巻 一冊 寫　　山口景德

淺見綱齋丸子默齋か詩傳に景德か所見の說を錄せしものふり綱齋か記を首にかゝけ次に默齋か說を出し末に景德か記を出す綱齋か記を書正統監本詩書集傳後といひ默齋か記を攻定詩傳或問といひ景德か記を讀詩

大旨といふ

詩經譯解十五巻 十五冊 刻　　皆川愿

本文章句ごとに字義を細注しまたその大意をのふ全篇漢字もて注せり安永九年庚子冬十月自序並序附錄或問等を附す

讀詩要領一巻 一冊 刻　　中村明遠

西土の書を引徵し自說をのへて詩經に關りし事を記せし書ふり詩原、采詩、詩刪、次に詩六義、漢四家詩、詩序、詩教、讀詩、詩音、詩傳の目をたつ延享二年乙丑夏五月の自序あり

周禮圖解四巻 四冊 刻　　川合衡

巻中題して考工記圖解といふ衡かつて三禮解を作る其繁帙を以て先考工記を梓す唐土諸家を錯綜し問と圖解を出しその器物の寸尺を詳にす寛政八年仲夏紀德民序同年四月山本惟恭同年二月祭酒林氏序ありて年月を不記全谷英及ひ倉成堅等か跋を附す

父母存不許友以死說 一卷 一冊 寫

淺見絅齋

父母存云々の語ハ禮記曲禮篇に載するもの鄭玄是を解して以死爲報仇讐といへるを朱子改め解して死謂相衛非報仇讐也といへるを主張して朱子の基本とする所公羊傳程子の語をあけて朱註を考證し又別に程氏遺書或問および語類等の說を後に附しすへて戰國游俠の士その親己に死するのゝち人の復讐に身を委するハ甚理にあらさる事を破し臨難の時ハ難に處せさる己前と其處置おふしからす死を委するハ其義によつて制すかふらすしも父母の存不存に拘らさる事を明らかに辨せり

優游社漫筆 一卷 一冊 寫

優游社は田中應清の號にてこの書は應清の門人か筆記せしものゝ應清はしめて投壺の禮を我邦にて用ひし事を志るす此本題號は後人の附會と見え卷中にハもとれり○應清字子纓江南と號し三郎右衛門と稱す別號を投壺堂といひ學塲を甘谷園と稱す投壺の事發明せし書凡七部をあらハす其事にくハしきハおして知るへし水戸支封守山侯の藩士ゝり

中井積德

深衣圖解 一卷 一冊 寫

自跋に明和二年乙酉孟冬履軒幽人と志るす禮記深衣の篇玉藻の篇を掲け出し自らの考および圖をあらハせり

春秋折中十二卷 十冊 刻

福井軌

此書題して曆史大體春秋折中といふ軌かつておもふ杜氏左傳を以て曆の簡牘とす故に專ら傳によつて經を主とせす修文義例ゝ旨にくらし後の學者みふ是にもとつてたゝ道氏子常初て策書筆削の法を明にし其義まさにくはし今趙氏の三書にもとつき群說をあつめ自見を附して此書を作るとふり寛政三年辛亥自序并男祥鈞序及綱領數條をのせたり

春秋述曆 一卷 一冊 刻

澁川春海

算哲松田順承と同撰寛文九年己酉林子序及自序あり林子序にいふ二子共に天文曆數の學を好み粗その奥秘を極む其餘力をもつて博く歷代

の暦書を考へその算法に據て春秋十二公の際經傳載する所の歳時月日を叙て年を逐ひ暦をふして春秋述暦と名付るよしをいふ此書の体裁本紙一牒を四畫して四年とふす月の大小支干冬至日月の蝕閏月等を志るし間々經傳候刻の差異等自らの考を下せり

春秋杜暦考一卷 刻一冊　一名春秋長暦　同

又順承同撰寛文十年庚戌自序ありこの書ハ隱公元年より哀公二十七年に至るまて凡二百五十五年三千一百五十四月月ごとに大小及ひ朔支朔干等を志るし又杜預か說をのするもの有り

左傳觴十卷 刻十冊　岡白駒

經傳及註の疑ハしきを拘けてその意を注す寶暦五年庚辰上木

左傳考七卷 寫三冊　戸崎允明

寶暦五年乙亥自序あり西土の說および本邦諸子の說と自己の見識を附して考を志るせし書ふり

左傳三事考一卷 寫一冊　井狩總

艮之八圖解二首　六身圖解　十時十位　配當圖解この三事の考ふり末に寛保癸亥歳孟春二十二日雪溪處士井總爲醉墨主人圖解と志るせり次に總より蘭洲五井先生に復する書一篇を附すこれハもとよりこの書にあつからさるもの後人の附せしにや蘭洲名ハ純禎字子祥藤九郎と稱し攝州大坂の儒士なり

春秋左傳國次七卷 刻八冊　金澤休

左氏經傳を周及十二國の國分に類聚せしものなり首巻序凡例とす寛政九年丁巳正月奥田元繼同七年乙卯冬仁井田好古同九年十一月山中正誼同年九月從五位下飛騨守藤原世英同五年癸丑紫野邦彦同年箕浦直彛同年秋岡田挺之同年本田黼同年九月恩田仲任同年孟春勝利衷同年源義元同四年冬安東守官同仲春百濟龍成同三年辛亥河村勝益根同年秋八月海保皐鶴等の序および同壬子冬十二月の自序あり

孝經刊誤集解一卷 一冊 刻　中村惕齋

朱子の孝經刊誤に集解を注したるものゝはしめ惕齋諸子の注疏をもとゝしまゝ私意を加えて一部とゝふし孝經集說と號しけるか門人增田謙之に託し董氏の大義によりて寬字を刊り一に朱子の意に從ひ解語ハみゝ集說に取りこれに分繫して講讀に便ならしむと云々元祿九年丙子六月謙之序あり

孝經刊誤附考一卷 一冊 刻　太田元貞

これも朱子の刊誤に附したる私考にして諸書を引て證とゝふせり

九經談十卷 四冊 刻

孝經大學中庸論語孟子尚書詩左氏周易の九經まゝ西土の書を引て未發の說を極む首卷を總論とす四十二條あり文化元年甲子上木

七經雕題七卷分爲十八卷 十八冊 寫

卷首并言三則あり易書詩左氏傳禮記論語孟子七經皆新注に依て自己の見を加ふ易の尾に序例を論并し詩の末に附言を載左氏傳の末に杜氏の後序僞作ふることを論す按るに此書大凡字句の際を論して大義に發明する所ふしといへとも刻苦の勞また少とせすされと易經の經の字を緯に對するを以て贅とし彖傳夫子の作にあらすとし繫辭の傳の字を以て刪へしといひ詩中淫奔のものを刪らんとするかことき其他古を排斥し我より古をなさんとする類古義を壞るものあらんか注釋の得失は於て論せす標題もまた侮慢の言に近かるへし此本作者の手澤と見ゆ

六經編考一卷 一冊 刻　淺見綱齋

六經編集の濫觴名義故實注釋者の名氏にいたるまて諸書に考へ志るし初學をして其來由を知やすからしむ

書詩禮曆考一卷 一冊 刻　澁川春海

寬文十一年辛亥の春あらはす所ふり詩經書經禮記に出る所の年月日時を抄出しその大小支干等を考へ志るせり

詩書古傳三十四卷十五冊刻　太宰純

詩經書經の標目を掲け古書を引て解ぜし書ふり第一卷統說第二卷より第二十六卷に至るまて詩第二十七卷より第三十二卷に至るまて書第三十三卷第三十四卷逸詩書とす此二卷ハ諸書に散見する處の詩書の文を抄出せしものなり寶曆七年丁丑九月大鹽良序元文二年丁巳十二月服元喬序同四年己未三月山縣孝孺序總目幷引用書目あり凡三十四部皆秦漢以前の書ふり延享五年戊辰三月門人大幸方跋あり序跋を按るに此本純か歿後稻垣長章等相謀て校正し鏤梓する所ふりといへり

四書古義十九卷十冊刻　伊藤仁齋

仁齋自注の定本ふり

大學定本一卷正德三年癸巳鵠月長胤の序貞享二年乙丑四月伊藤某跋あり長胤序にいふ先人壯年敦篤學を好後稍く其然らざるを疑ひ專語孟二書を信して嘗て注解をあらハす又門人の請によつて鄭玄の古本により

數節を移動し管見を附して名曰定本云々

中庸發揮一卷正德四年甲午正月長胤序あり先人已に語孟を解し又此書に及ふ釐正甚多をもつて名て發揮といふ

論語古義十卷卷首論語總論を著す正德二年壬辰九月長胤序にいふ先人此解を草す改竄補綴五十年猶にふん〳〵とす凡五たび稿を加ふと○按るに閑散餘錄に中島正佐ハ仁齋の門人なり教授舌耕を業とす今の論語古義ハ此人の校正ふりしといふ文字誤寫多しおしむへしとみえたり

孟子古義七卷初に古義總論をのす享保五年庚子八月門人香川修德跋あり○文會雜記にいふ元獻曰仁齋の孟子古義殊の外出來たり仁齋孟子の一部にて何れもおしなるといへり禎お見と符同す云々禎ハ湯淺常山の事にて文會雜記の作者ふり

四書越俎四卷四冊刻　釋大典

學庸解、講論、講孟となす天明二年壬寅自序寛政六年僧六如序あり自

序にいふ四書の目宋儒より立、天下之を奉す後之を斥排するものあれども
矢関する事ふし此その理行れさるを得さるものか乃その蔽を斥排するも亦
無んハあるへからす故に今小言詹といふ間々古書を引證し自見を列ぬ漢
字もて忘るせり

四書序考四巻 四冊 刻

四書の序文をかゝけ諸説を引て註を下す撰者を詳にせす

萩生徂徠

大學中庸解三巻 三冊 刻

本文章句ことに漢字もて自見を註す元禄元年戊辰之春橘信受序並川
富跋あり按するに文會雑記に大學の解ハ徂徠翁水野明卿の方へ行れし
時明卿大學のことを問れしに成ほど此間吟味し考存寄も出來たりとて金
華に筆をさらせ一晩に出來たるよしみえたり

大學啓發集六巻 七冊 刻

山崎闇齋

此書ハ小學蒙養集とおなしく文集語類等の中より大學の疑問を開説せ

られし語を集めのせたり書名論語に不憤不啓不悱不發の語取よし自序
に見えたり首巻を序例とす

淺見絅齋

批大學辨斷一巻 一冊 刻

元禄六年癸酉會津山崎泉大學辨斷を作れり是より前伊藤仁齋十辨を
作て朱説を批駁す泉是によつて辨斷をつくり防隄の裂を螻穴にふさくと
れともいまた程朱の高明をあらはすにたらさるを以て安正又是正して批辨
斷を作りしものなり巻尾元禄九年丙子安正か附言あり翌年上木

同

大學明德説一巻 一冊 寫

朱文公章句およひ或問中に於て明德の説を論するもの已に發揮詳盡すと
いへとも安正さらに學者のために其説を推廣擴充して猶その詳細を辨せ
り

同

大學物説一巻 一冊 寫

開巻詩曰天生烝民有物有則大學曰致知在格物の二則を大字に提書

しつひて他の經傳中に物の字を說るもの共に發明參考に備ふへきものを類聚しおのれか所見をもましへ志るせり寶永三年丙戌十二月記す所紙員僅に五牒に止る

伊藤東涯

大學定本釋義一卷 刻一冊

仁齋かあらハせし定本の義をひろめし書なり元文四年己未五月弟長堅か序ありいふ先人大學を以て孔子の書にあらすとして遂に弁を作り十證を著す亦定本を作り亡兄亦釋義一本を著して翼之といへり元文三年戊午九月門人度會未濟跋を附す

釋大我

大學考一卷 刻一冊

首章の注解ふり本文をかゝけ漢帥もて解をふす寶曆八年戊寅五月牧春卿序同六月釋敬雄序同七年丁丑八月自序同年自跋同年釋圓中後序あり自跋の末一絶をのす

中村明遠

大學衍義考證八卷 寫五冊

伊藤東涯

孟子考證と同し体裁ふり

皆川愿

中庸發揮標釋二卷 刻二冊

仁齋か發揮を附翼すへき爲に述るものなり元文己未弟長堅序あり

皆川愿

中庸釋解二卷 刻二冊

本文章句ことに字義を細注しまたその大意をのふすへて詩經釋解とことふらす同体なり卷首篇旨圖をあらはす文化三年丙寅鈴木堯紀刊行の跋あり

室鳩巣

論語集註廣義一卷 寫一冊

全きものにあらす序說より學而篇にして止む序說の次讀論語孟子法といへるものを出せりこれハ朱子程子の說を以て二書を讀む法則とせしものふり凡九ヶ條あり

皆川愿

論語譯解十卷 刻十冊

書体上の譯解と同し安永六年丁酉夏六月自序あり

論語徵十卷 十冊 刻

荻生徂徠

徵とは古言に徵するの意にして漢儒および自己の說を下して集註を排せしものをり按るに五井純禎か非物篇に徂徠いまた皇侃か義疏を見す晩年此書既に成て偶得てこれを讀然るに卒業せすして物故す予嘗徵の寫本を見しに皇か說旁に添入して公冶長篇に終れり故朱註の皇說に同しきものを以て朱說とし道學の見也とハこれを駁するもの多し笑ふへし今の印本ハ其門人改定して醜を捨ふ故に世の人是を知る物少し凡此篇章々に戻り句々に誣たるよしをいへり

非物篇六卷 三冊 刻

五井純禎

徂徠か論語徵の非を論辨せしものをり書中にいふ凡此徵章々に戻り句々に誣非の加へき事ハ一是あるにあらす不遑枚舉と云々この書藁を脫せすして物故す其徒中井積善同積德兄弟校正して梓行せしよし明和三年丙戌積善か序にみえたり

非徵八卷 四冊 刻

中井積善

門人早辨之較す前の非物に幷せて徵の非を舉たる書ふり餘力を殘さすといふへし天明三年癸卯早幷之跋あり

讀書正誤一卷 一冊 刻

石川安貞

荻生茂卿かあらハせし論語徵の誤を糺し及ひ太宰か古訓外傳等を古說に考へ正史の誤をも正したる書ふり自序あり

孟子要略一卷 一冊 刻

山崎闇齋

自跋によるに孟子要略ハ朱子紹熙三年六十三歲にして著す所先に嘉此書を搜求するに見る事を得すその書たるをいふかりしに眞西山集を閱するに及ひて德秀此書の序を撰するものあり其書の體例編輯の次序略そふはれりこゝに於て其目次に困みゝ愼むに本文を以てし又朱子の語これにおよふものを採拾して編末に附し眞德秀の序を卷端にかゝけ他日原本を獲るをまつよしをいへり

孟子考證一卷 一冊 刻　中村明遠

考證八篇に分ち開卷標題をかゝけ卷首に二三の同志と孟子に從事しついに文獻の徵すべきものをさゝり編次をふして考索に備ふと云々是本延享五年戊辰三月上木

孟子譯解十四卷 七冊 刻　皆川愿

書体中庸論語等の譯解に同し寛政九年丁巳孟春自序あり

小學蒙養集三卷 三冊 刻　山崎闇齋

朱子文集語類等の中より朱文公の門人等の小學書中疑惑の質問を文公開說せられし語を集めのす書の名易に蒙以養正聖功也の語にとれるよし自序に見えたり又寛文九年己酉五月四日蒙養啓發集自序自跋あり

小學備考六卷 六冊 刻　貝原篤信

每條本書について考究し且諸書を引て註解を集む寛文九年己酉の自跋あり同年上木○按するに文武訓竹田定直か序に云益軒少壯の頃まてハ

程朱の書世に行はれす小學近思錄のごときものよむもの少ふし益軒京師に寓居し二書を講說し備考を編輯して世に廣むこれ著述の始にして又吾邦に於て二書の註翼出たるもこれを初とす先生の功大なりといふへし云々

朱子家禮筆記 九冊 寫　淺見綱齋

三宅尚齋か享保十丙午序無名氏の序ありこの本卷數をしるさす綱齋か未定本ふるよしハ序中に見ゆ黑白の圈をもて元本と註文とを分つ自說のまゝ圖を加ゆ奥書に元文四年己未晩夏宮崎眞利書寫之とあり

家禮訓蒙疏四卷 三冊 刻　若林進居

朱子家禮注文にいたるまてを假名にて解せり享保八年癸卯之秋自跋あり

家禮通考一卷 一冊 寫　室鳩巢

これも朱子家禮を諸書に考一格を低してみつからの說を註すれと全きものにハあらす○按るに西銘詳義の序に先生著す所大學新疏及ひ文集既に

刊して世に行はる詩易語孟中庸皆廣義ありしか惜かふ嘗て災に罹てその
草本蠹殘收拾の餘わつかに十一を千百に存す唯大極圖述およひこの篇
辛ひに全を得るとされいこの書と前にいふ廣義等ハ皆殘篇なること知るへし

谷口　重遠

譜法一巻 刻一冊

貞享四年丁卯七月の自序ありいふ頃日竊に蘇か法により參るに經傳諸
家の言をもつてし定て譜法三篇とふす上篇ハ大小宗を論し中篇ハ譜式を
論し下篇ハ後おきものを論すと云々巻末答友人書一篇を附せり

伊藤　東涯

釋親考一巻　續編輩行說一巻 刻二冊

凡て親族の事にかゝれるものを漢字もて辨記せり首に宗族母黨内外兄弟
妻黨夫黨等の圖を出す甚益ある書あり井上純卿もこの書大に世教に益
あるよし匡正錄に述ふ

續編九親の名目にかゝはる文字を提出し出所を注す六帖の体のごとし閑
散餘錄に名物六帖僅に人品器財二箋のみ刊行して餘ハまた行ハれす但

釋族箋ハ親釋考の附錄に合刻すと則このことなり附輩行說は祖父行父
行兄弟行子行を圖し一より十數にいたるまての次第を并す元祿十四年
辛巳春三月著す所享保乙卯七月安原貞平序あり

大塚　孝成

九親服屬諺解一巻 刻一冊

親族の差別により忌服の輕重あることをふこもろ〳〵の書に考へ俗に通しや
すく假字につゝれる書なり天明六年丙午四月の自序あり寛政十年戊午
上木

黄門　光圀卿

喪祭儀略一巻 寫一冊

此書は西山公みつから喪祭の禮式をえらひて藩中に須行せしむるものとい
ふ凡病者絶命の後斂殯の事より葬埋にいたりすてに葬りて後祭祀をいと
ふむこの事みふ國字にしるしその用ゆへき所器物の形象等まて圖をあらは
し皆古禮を折衷し世にかふひ時によろしく人々行ひやすからむるの法
をもとるす

二禮童覽二巻 刻二冊　藤井蘭齋

喪祭の二禮を假字にて志るせし書ふり萬治三年の自序にいふ喪祭の二禮世のふらハしのまゝふるハあまりこゝろよからす覺へ侍れハ朱文公の家禮のおもかけいさゝか家にあらまほしくてひそかにみつからかの書を抄略し俗語にかへ俗禮をましへ婦女兒童のともからまてこれをよみ見てかはかりの事ハよくふしてんとおもへらむやうにと書つゝ終にこのふた巻となりぬ云々○元祿元年戊辰十一月上木

通祭喪葬小記二種 寫一冊　淺見綱齋

喪祭の事を志るしたる書にして二種に分つその通祭小記ハ祠室通禮春饗秋饗忌日等の類を分ち記す喪祭小記ハ初終斂葬虞小祥大祥禫等の類を分ちみふ國字にて志るせり二稱共に巻首に目錄を揭く元祿四年辛未の自跋あり

葬禮略考 寫一巻 一冊　荻生徂徠

文公家禮中の葬禮に自からの孝を載

葬禮考 寫一巻 一冊　同

前に同しされと後人の書加ふものと見へ巻末字義譯文を載するもの有

追遠疏節 刻一巻 一冊　中村惕齋

元祿三年庚午仲冬の自序にいふ竊に朱氏の祭禮をもつて本據とふし邦俗の行ふへきものを叙して一巻とふし聊士大夫家奉先の儀略を擬し且下ハ民庶の微におよふまても韮麥の薦もて歆享をいたすへき事を志らしむと云々

追遠疏節聞錄 寫一巻 一冊　増田謙之

享保十五年庚戌五月の引ありこれその師仲村惕齋かあらハせし追遠疏節に一格を低して諺解を施し及ひ己かかれて暗記せし說等を附記せり

祭禮節解 刻三巻 二冊

この書も文公家禮中の祭禮にして一節ことに假字にて註解せり撰者をあ

らハさすがいへども蓋貝原なるの手に出しかとしらる

祭禮通考一巻 一冊 寫　古屋　爾

喪祭の事を解たる書にして廟制神主立尸祭田祭器牲物祭法祭期時日齋戒祝號祭名忌日立祝みな盡く諸書を引て證とせり又往々平安の橋祭か音義を加ふるものあり

稷饋儀略 一冊 寫　同

牲を用ひさる祭祀の禮を述ふ漢文ふり巻首に饌を備ふる圖を出す三傳三禮をはしめ諸書に證をとれり

蘭林先生口授葬祭式一巻 一冊 刻　中村明遠

此書ハおよそ人老に至らすして棺槨衣衾等を設置へきして古人の意によりみつから後の事を託しおきしを門人義路といへるもの志るしおく所ふり

性論明備錄一巻 一冊 寫　山崎闇齋

性之說明道先生にいたつて古聖賢未言處を盡したれども朱子の說解の詳ふるにあらされハその蘊奥を極むへからす因て程子の論程子の說を合せ錄す寛文十二年壬子自序あり

仁說問答一巻 一冊 刻　同

此書朱文公の仁說並圖及張南軒呂東萊の輩仁の理を論せるものを合せあつめたる書ふり寛文八年戊申自序あり

闢異一巻 一冊 刻　同

先儒異端を付するの說をあつむるふはち攻乎異端斯害也已を以て主とす巻尾に自ら論する說一條を附す其著述之意已に傳中に見る

拜說一巻 一冊 寫　釋顧常

凡二十四則みふ諸書を引て證となす拜揖鞠躬等の儀を明したる書ふり巻末明和二年乙酉九月十一日成稿と志るせり

蒙求啓三巻 三冊 刻　服惟恭

李氏蒙求の訛謬異同を正し小冊に約して初學の便にあらはせし書ふり

諸書を引て頭書に註解をかゝく己未仲夏服元喬序元文四年自の考例
天明戊申齋之拍跋あり寛政改元上木

蒙求拾遺三卷三冊刻　桂廣保

李氏蒙求にもれしものを作る四百八十句を得たりと云服部元喬序寛延
二年己巳自述る所考例附言等あり末に同三年庚午山縣孝孺跋を附す
寶暦二年壬申上木

蒙求續貂二卷二冊刻　恩田仲任

李氏蒙求にもれしものをあつめし書なり松平秀雲及紀德民序山世璠後
序あり安永九年上木

說文字母集解六卷六冊刻　井上章倫

師良察の志を繼あらはす所說文五百四十字母を錄しもろ〳〵の註を校
讐して字躰の同異を明し聲音を正せし書ふり元文三年戊午從五位下
侍從基祐序同年林子信充の序及自序凡例同年村井周齋跋あり寛保

元年上木

朱集官府文字考一卷一冊寫　淺見綱齋

三宅重固と同撰する所ふり朱子文集第十六第十七第十八三卷の中よ
り官府の文字を抄錄して諺解を施せし書ふり卷末元文元年丙辰疆齋
若林進居か奥書あり

唐話纂要六卷六冊刻　岡島援之

西土平生言語の塾字二三字或ハ四五字をあつめ幷長短語の連語親族
鳥獸草木器械の唱呼歌曲紀事等傍に國字をくたして音の響を辨す享
保元年丙申九月醫林將監藤原安治同年紀府侍醫高希撲序及同年紀
陽白樫仲凱及ひ紀府侍講霞洲原武卿等か跋あり

唐語便用六卷一冊刻　同

唐土日用雜話の文字を集め唐音及和訓發聲等を施す享保十年乙巳春
二月釋大潮か序あり

道齋隨筆三卷 三冊 刻　　中村和

訓詁音韵の迷ひやすきものを集め解けり國字にて志るす附錄唐詩選序跋故事をのせ寶曆五年乙亥八月宮奇か序中和か君道にあたふる尺牘桃尚德か跋及び目錄あり○君道姓ハ金田名ハ宏平安の人すふハち此書ハ君道か道齋に請ふて上木する所ふり

梧窻客談二卷 二冊 刻　　山田久作

正德三年薄彥か序同年湯隆か序同四年甲午黑平序同三年雪溪居士序同年久作自序同四年山中賢序及凡例五則あり此書ハ或人伊藤仁齋かあらはす所語孟字義理氣并論三才辨義等をもつてその說の可否をとふ久作依違して答へすゝつて討論してその評を受て筆記せしよし薄彥か序に見へたり專ら古學を排擯するの說にして下卷載るところ佛說を引て是を證するもの頗る人意を快ふすと三宅重固か默識錄にみへたり

經學文衡三卷 一冊 刻　　伊藤東涯

第一大極圖說の并より晉趙盾の論にいたる皆宋元明の諸儒の論說を輯錄して末に自の按を抵書すもと東涯學者經意を發明する爲にあらハせし書ふり享保甲寅伊藤長衡序あり同年上木

史說　　岡白駒

史記鶡十卷 五冊 刻

躰載左傳鶡に同し本文解しかたき所をかゝけて自の說を注す寶曆六年丙子上木○白駒か左傳鶡世說鶡荀子鶡及この書を合して世に志く志りといふそハ妄說あるより或ハかく唱へしふれとも其說によりて固結を解もの少ふからす益あるものふり

史記天官書圖解補注一卷 一冊 寫　　西村遠里

天官書に載する諸星を圖にあらハしみつからの考をくたして補注とす寶曆四年甲戌自序あり

國語考四卷 一冊 寫

寛政十一年丁未自序あり盧之頤本齊汲本の國語を校讐して異同を正し諸子の説と己が説を附して注したる書なり

戸埼允明

國語律呂解一卷 一冊 刻

周語の中王將鑄無射云々の一章につき律呂の事を考て註解せし書なり春暉さきに傷寒論の分注および外傳等の書をあらハしまた律度の事を研究して合劑の量を正しその緒餘たま〳〵此書におよびしよし寛政六年甲寅臘月福井軌の序あり同七年乙未上木す

橋春暉

戰國策考八卷 五冊 刻

疑しき文をぬき出し且鮑彪吳師道二家定本を引てその誤を正しまゝ自見を加ふ又通考と標し事實をさくりて考の助に附す八卷の末に附錄注解正誤を載す安永六年丁酉源頼亮序これ允明が藩主ふり同三年甲午自序又總目を出す卷尾山本信有後序同五年丙申東龜年後叙あり按るに藍田文集に守山侯頼亮熊耳餘承裕に命して序を作らしむとみえたれど刻本にハこれなし

戸埼允明

戰國策異同考一卷 一冊 刻

國策の異本數部を比校してつぶさにその異同を考志るせし書なり寶暦十四年甲申夏の自序を按るに大有京師に官するの日二三の同志と戰國策をよむに及て諸公家藏の數本を會萃して詳讀參攷しその小異同あるハ是非得失を擇はずことゝく是を擧錄して敢てみだりに雌黄を下さずその舊に忠たかふよしをいへり

福家大有

戰國策高注補正六卷 六冊 刻

寛政八年丙辰從四位下源忠道序同年長洲滕賢序及同年自序凡例あり國策高誘が注本久しく遺逸し名儒の校定を經て猶錯簡あるをもてこの編をつくりしよし凡例に見ゆ穆文熙林西仲の注評徐孚遠陳子龍及方苞の説ハ史注に係る類皆併せ錄せり

關脩齡

言行錄輯釋前集二卷後集二卷四冊刻　近藤元隆

八朝名臣言行錄二十四卷は宋朱文公の輯錄にして太祖より徽宗にいたるこの本は其うち制度文物の徵しかたきものを諸の書より考へ出し又脫誤を正せしものふり本文に分注して自說を出す文政二年己卯清水正德序及び自の序說あり

歷代君臣要略八卷八冊刻　黑谷壽翁

周以來明の初にいたるまで歷代君臣の事蹟を略記し每條訟判を加ふ凡例にいふ大抵歷史より摘みて通鑑の体にならひ君臣を分ち又舊史評斷諸家文集語錄を取て是に附す又自見を細書し先賢の說に分つといふ第三卷まで君類とし其の以下を臣類とす貞享三年丙寅七月鶴山野節序同年三月自序引用書目あり又同四年丁子貝原篤信跋あり

靖獻遺言講義二卷一冊刻　淺見安正

さきに安正靖獻遺言をあらはし楚屈原をはしめ明方孝孺に至るまで忠臣の時を得すして節義尤凜然たるもの八人の文辭詩句をとり其傳をのせ每卷末に類を以て世々忠臣義士の事狀を附し士の規範を示す是安正か上木する所ふり其後安正又書生のためにその餘論曲說の明辨しかたきもの是か講義をあらはしいまた上梓せさるを安正歿後その門人のはかりて上木するところの書ふり自跋および門人の跋あり寛延紀元戊辰秋九月刊行○湯淺元禎か文會雜記に曰安正身關東の地をふまずみつから諸侯に仕へすと誓へりもし時を得ハ義兵あけて王室を佐くへしとて此書を作れりといふ其意王室を尊ひ我君を君とするの心を明せり又其意尤高上にして春秋の意味を知らすんハ深意を探りかたき由篠崎維章もいへり

孔聖生卒考一卷一冊刻　大井守靜

天和元年辛酉田訥齋序延寶六年戊午自序及び自跋あり宣明曆の法によりて春秋襄公哀公在位の年月を推し大小節氣を考へて公羊穀梁左氏三傳孔子生卒の異同あるを并せし書ふり卷首七絕一章あり

生年己酉公穀伴十月庚子正是周卒歳壬戌七十四四月己丑見春秋

李伯紀忠義編七卷七冊刻　塚田虎

宋丞相特進李綱字伯紀忠定と謚す徽欽高三宗に仕て尤忠節をあらはす然れともその志行れす世以て慨する所なり此書伯紀の事業文辭を集錄す文化六年己巳四月自序ありいふ本藩國校伯紀文集四十四卷を收む先公命有て活板を以て梓行せらる然れともその文句讀よみかたきものあり今その全集について宋の興亡に關るものを抄出し七卷を得るといふ又自らの跋言あり

乾隆南巡記一卷一冊寫　馬場元基

長崎譯官林某の記す所來舶人の物語を假名に書留し記にして清の乾隆帝二十七年正月寶曆壬午を以て江南浙江の二省へ巡狩せし時の始末をくわしく載せたり

草亭閑談一卷一冊刻

西土の風俗産物等を記す清朝の人沈墉來舶せし時長崎の譯官馬場元基聞書にせし話說ふり

三韓紀略二卷二冊寫　伊藤東涯

馬韓辰韓弁韓の事實漢字にて志るせり君長略　記號略　土地略　職品略　族望略　文籍略　方語略　等に分つ寶永元年夏六月の自序あり

唐官鈔三卷三冊刻　同

唐六典を鈔錄せし書にて本朝の職原鈔のごとく片假名にて志るす寶曆癸酉藤原榮親刻序享保丙辰自序寶曆癸酉伴重威跋あり初めこの書近衛公よりさふれる事ありて刊行隙とりたるよし元禎か雜記にみえたり

明官古名考一卷一冊刻　林義卿

武谷成章寶曆元年の序北貞卿寛延辛未の序あり唐土古今官職沿革を志るす寶曆元年直春卿跋あり

吏民秘要諺解五卷六冊刻

元祿八年仲冬自序に豫陽の隱士指月堂とあり姓氏を載せず開卷總目あり明の張希孟か作りし牧民の道をかきたる書をある人示せしを觀るに龜鑑ともふるべきことを多きをもて世に解しやすからんか爲に俚語をもてこの解を作りしよし自序にみえたり

問刑條例國字解三卷 三冊 寫　　荻生茂卿

問刑例は明朝會典の一にして茂卿か國字もて譯せるものふり上卷名例律中卷吏律戶律下卷禮律兵律刑律工律を解せり

明律國字解五卷 五冊 寫　　同

明律三十卷凡四百六十條の內的緊の文字を抄し假字にて解したる書ふり文會雜記に云祿翁明律を解せられたり翁の弟叔達屢縣官の召にて律のことを聞せ給ふ故に橫帳にして懷中せられたるか少しつゝ叔達の意もありそれを何人かこしらへて贋物して世に出しけりそれもえ贋物ハ少部ふりと老師の話ふりといへりと云々

大明律直解十二卷 十二冊 寫

假名にて解したる書にして物茂卿か明律國字解よりハ頗る詳悉をくはふたゝし刑律鬪毆にいたりて止む全篇に及ハさることうらむへし

明律譯註九卷 三冊 寫

律及注文にいたるまて解しかたき文字を抄錄し譯文を下す卷末補遺一卷をのす

明律口傳無卷數 七冊 寫　　奥村保之

師竹溪の解義を口授のまゝ筆記せしものふり寶曆二年壬申九月の自序あり

番外雜書解題卷之十六 終

儒家

番外雜書解題卷之十七

戸田氏德 編輯

子說

孔子家語考二卷 寫一冊　戸埼允明

太宰純が增注および岡白駒が補注等によりて自の考を志るしたるものゝ

荀子觿二卷 寫一冊　岡白駒

揚倞が注の足らざる所を補ひしものゝ末に寶曆丙子春三月と志るす白駒が觿三部ともに上木すゝ荀子のみ上木せずして世に行はる

荀子考二卷 寫一冊　猪飼彦博

揚倞が注と物徂徠が讀荀子とのあやまりを正しおよび家田大峰が荀子斷の得失を質すもと或人の需に應して作りしよし寛政七年乙卯の自跋にみゆ

大極圖說十論一卷 寫一冊

姓名を著はさず無極而大極　無聲無臭　繼善成性　五行一陰陽　無極之眞　五性感動　陽善陰惡　定之以中正仁義　無欲故靜　体立而後用行この十倫を漢文もて志るしたる書なり卷ごとに目錄をかゝく

近思錄備考十四卷八冊刻　貝原篤信

呂祖謙か近思錄の字義訓詁を諸書に參考して註解を集む寛文八年戊申六月の自跋あり同年大坂に刻す

近思錄鈔說五卷五冊寫　中村惕齋

卷中尤通しかたき章を標出して諸儒の說を附錄しおよびみつからの見識をもましへ志るす元錄六年癸酉の自序あり

劉向說苑考二卷二冊刻　桃井源藏

寛政十年戊午十一月自序あり又卷首に劉向傳をのす明何良俊采曾鞏か二序より本文諸篇みな一兩句を提出して自考をその下に注したる書なり

沖漠無朕說一卷一冊刻　山崎闇齋

沖漠無朕とハすなはち近思錄に載する程子の語にして其一章に嘉か所見をもて注解を下し續て朱子並其門人の說かつ讀書居業自省三錄の說をも抄出志て參考に備へり

語錄解義一卷一冊寫　同

朱子語錄中より俗字及ひ俗語の尤解しかたきものを記出して逐一その義を解したる書ふり

白鹿洞書院掲示講義一卷一冊刻　同

山崎嘉か集註淺見安正か講義を合せしものにて集注ハ漢字にて記し講義ハ片假名もて志るせり慶安三年庚寅冬十二月戊午嘉か集注の序あり安正絅齋と號し十次郎と稱す嘉か門人ふり

學規集注一卷一冊刻　同

又白鹿洞書院掲示にして文集の中より表出志て每條その語の出所及先

儒の説をあつめて注解せり慶安三年庚寅自序あり　室鳩巣

西銘解義一卷一冊刻　張横渠か西銘および朱子の解文にいたるまでことゝくみつから説を附して解たる書ふり天明四年甲辰仲春集堂元成か序あり　淺見絅齋

拘幽操附錄一卷一冊刻　拘幽操ハ韓子の作る所山崎闇齋かつて程朱の言を標章して是か附錄を作る然れとも約にして己に逸せり安正ふたゝひ先儒の説をあつめその義をひろむ我君を君とするの義を明にしたる書ふり元祿四年辛未自跋あり　佐藤直方

排釋錄一卷一冊刻　朱子語類文集の中より佛を論する説を輯錄せし書なり貞享二年乙丑夏至自序あり　會津中將正之朝臣

三子傳心錄三卷三冊刻　題して伊洛三子傳心錄といふ楊龜山羅豫章李延平三子の本集語錄問答の中より道學に益ある文辭を鈔錄せし書ふり寛文壬子孟春弘文院學士林子恕序及同己酉三月朔旦山崎敬義序同人跋あり　同

伊洛三子傳心錄三卷一冊刻　冊數を異にするのみ其余替りたることなし　同

二程治教錄二卷二冊刻　二程全書の内より治教に關る文辭のみを抄出す卷首の序一簡を脫して名氏を志るへからす寛文八年戊申季夏山崎嘉序並跋あり　同

玉山講義七卷三冊刻　寛文十二年壬子仲春弘文院學士林恕か序及ひ跋あり卷末にいふ朱子の性と天道とをいふ布ひて文集語類の中にあり乙巳の歳寛文五年玉山講義を表章し且その講義を參驗すへきものを抄書して名つけて玉講附錄といふ凡上中下三卷上下の兩卷各一二三に分ちすなはちもつて繕寫す云々この書即ち卷首に玉山講義を表章し次に玉講附錄に及へり

道統小傳二卷 二冊 刻　武田信成

羅山林子の撰する道統の傳いまだ淺せるもの有を以てひろく經史によりてあらはす所ふり寛永 廿一年甲申八月羅山林子序同年十月自跋 あり天和元年辛酉上木

歸正漫錄一卷 一冊 刻　一名辨道漫錄　安井眞祐

元祿二年己巳の自序及自跋ありて宋明の儒生數輩の佛老を論したるものを抄出せし書ふり自跋にいふ漫錄すでに理氣性命の類にいたるこのころ病をつとめて校正すわつかに異端の類梓に布すと則この書ただその異端の一類のみふり簿補に書の來由及び撰人眞祐か事蹟の大概を記す書肆慶元堂か識せるところふり

孫子義疏七卷 七冊 刻　上田寛

明和二年乙酉菅俊仍の序同年自跋あり孫子十三篇を假字に解したる書なり附錄陣法考三則を載す

明清戰船考略三卷 三冊 寫　近藤守重

書上の体に記したり譯官ふとの手に出しにや明清二朝戰艦の制を會典類に考へその備立のさまを述ふ中卷下卷は蒙古入寇の始末を忘るす水戰の緣によるをもてあけたるふるへし

鑲旗考一卷 一冊 寫　附喇嘛考

清朝の軍製に鑲旗正旗合せて八旗有り方によつて色を分ちて徽號となす鑲の字義如何と忘るへからすといへども西土の書を撮抄して略これを圖解す

喇嘛考　又守重撰喇嘛とハ番僧の漢譯なり元剌麻に作るまた西土の書より一切番國の僧徒にかりし事を抄撮せしものふり

會繡圖一卷 一軸 寫

清朝武官冠服繡文の寫眞にして絹本の横幅なり着色最精密筆者の名ふしといへども近年舶來のものにあらす卷首に公預公補及公滯公侯伯補

二品をのすは是貴戚の公服ふるへし次に侯伯一品より九品に至まて各頂帶及補の圖を著す麟獅豹虎以下馬章に至るまて眞の錦繡を押すに異ふらす頂帶の縷文亦鮮明ふり最尾頂帶全圖各二品あり又卷首に會繡譜と題す柴栗山の擬筆ふり古人狗尾貂に續くの譬あり宜く撤去すへし

同

管子考三卷一冊寫

寛政壬子秋八月の自序あり本文の異同を舉け注文の謬をたゝしまゝ自考をのす

猪飼彦博

管子補正二卷二冊刻

本朝の坊本誤多く明板又善本なきを以て元冲原本を以て本とし諸本を參考しおよび他の群書を考へ字句を抄出してこれを辨す又まゝ自見の說を加ふ辛未六月朝鮮金世臣山清序寛政十年戊午五月彦博か題言並總評又年號ふし五湖太復朱長春か序あり寛政十年上木

荻生徂徠

讀韓非子一卷一冊寫

異同を考へ注文の誤りを正し往々注の足らさるを補ふ

戸埼允明

補訂讀韓非子三卷三冊寫

徂徠か讀韓非子の狗尾を補しものなりまた徂徠か藏本ハ錢塘趙如源王道焜か校正する所にして今行はる所の本と頗る異同あり允明か藏ハ即汝師の校本ふるよしをいふ

蒲阪圓

增讀韓非子四卷四冊刻

享和二年の自序自跋あり徂徠か讀に說を增益し善本を求めて異同を頭書にふす

津田鳳卿

韓非子解詁全書廿卷附錄一卷八冊刻

門人有賀義鎭安江信君實山內鈍君齡市島敬之維等か錄する所にてもとハ明の趙瀋之王昭平か同校する所の本に因り陳大史か評選本趙宗伯か校定本楊升菴か批評本等をはしめ十數家の本に參考しまゝ明清諸儒の說をも輯錄しその余初學記北堂書抄をはしめ字書地志類の書にいたるまて

韓子の本文と相發明するもの是をのせなほ足らざるものをハつまびらかに解詁拾遺にのするよし第一冊のはしめに見ゆ

第一冊　鳳卿か新刊韓子解詁後叙次に王道焜昭平父か重刻韓非子序次に重校韓子迂評引あり是ハ撰者の姓名をあらハさず次に門無子か刻韓非子迂評および小引あり次に歸安茅坤長興陳深吳郡王世貞奎章閣侍書學士抃等か序をのせ次に凡例綱領總評をのせ次に本文の注解におよぶ初見秦より主道にいたる○第二冊　有度より十過にいたる○第三冊　孤憤より飾邪にいたる○第四冊　解老より大體にいたる○第五冊　內儲說外儲說○第六冊　外儲說○第七冊　難より詭使にいたる○第八冊　六反より制分にいたる○附錄　史記本傳及參定說難是鳳卿か考定する所かつ孔叢子淮南子等より韓非にあつかる事數條を抄出す

此本文化十四年加州に上木

茶經詳說三卷二冊刻

釋顯常

安永甲午正月正二位香海か序ありいふ竟陵氏か茶經三卷世にそのよみかたきをくるしむ人あり大典に請ふて講說し極てその明を得るのちきくところをもるし遂に梓にふし世と是をともにせんと欲すと云々茶經本文の間に假字もて注を下す卷首に附言をのす卷末に明の孫大綬か編次せる茶經外集を附錄す次にまた唐の韓愈か撰へる陸羽か傳を載す陸羽字ハ鴻漸一の名は疾字ハ季疵唐の復州竟陵の人ふり

名醫傳略二卷二冊刻

吉田宗恂

上古伏羲より下明代にいたるまて西土にて醫道に名を成せるもの〻事蹟を歷史諸書より抄錄して集む慶長三年戊戌臘月朝鮮菁川姜沆か序および慶長二年丁酉正月の自序あり按るに此本羅山林子の所藏にして傳ことに其出所の書名を舉るもの林子の手書ふり本據明亮にして尤覽者に益あり前後林子の印ありのち世に散して近頃山本信有の手に觸るもの又その押印あり

明醫小史一卷 刻一冊　望月三英

享保七年壬寅服元喬か序三英か自序享保九年甲辰武千龍後序およひ例言八則姓氏目次等ありこの書ハ明代醫家の略傳を志るしたる書にして書体萬姓統譜尚友錄等のごとく韵をもて姓氏を分てり卷末清の順治以來の醫家をのせて附錄とふす

皇極內篇發微一卷 刻一冊　遊佐好生

享保元年丙申十月友部安崇か序及蜂屋可敬か跋あり蔡氏か皇極內篇の蘊奥を解したる書ふり序にいふ禹箕の道洪範にありといへどもその數ハ傳る事ふし蔡子その幽を闡て以て皇極內篇をあらはす蔡子の後よくその旨を明にするものふしこにわか山崎垂加先生洪範全書をあらはしその後錄もつとも理數の妙處を明にし占トの淵源を詳にし實に後學の幸ふりその門人遊佐氏好生親炙年あり造詣尤深く踐履篤實仰て我國天神下合の教を信し俯して易範象數の志かるゆへんを察して發微一篇をあはし巨細遺さす首尾該貫融會透徹かつてその說を先生に質す先生また深く是を賞して眞に得かたしとすと云々

樂制篇一卷 寫一冊　荻生徂徠

漢土歷代音樂の沿革を志るしたり上虞舜の時に起り下清朝にいたれり

射書類聚國字解二卷 刻二冊　同

卷首に書中の總目をかゝく一切射術にあつかる事を志るし一條ごとに標題をあけて假字にて志るせりみな西土の射をとく寛政元年上木する所也

蘭亭字原考一卷 刻一冊　脇田千之

蘭亭帖中の字をあけて考を附す古書を引證し漢文をもて記す凡二十餘字

温公七國象棋圖一卷 刻一冊　菊地武愼

相傳ていふ司馬温公七國象棋を作るその戲たる七人一局を圍むへく或ハ

三五人數に隨て二國三國をかねしむへし一國各一手を下し七手にして
はしめにかへる合縱連衡をむねとして其意王室を尊ひ覇をいやしみ與國を
親しみ患難相援ひ禮を立義を重するに表せりもと圖及ひ圖說あり武慎
よつて國字もて解す安永四年乙未龍洞主人松代城主眞田幸豊序同年岡野融序
及王逸民か序なのす又自跋及國字解自序鞠子方正の跋あり安永五年
丙子十二月上木

中田博

歷朝名公歌譜三卷三冊刻

宋元明清名家の書畫眞蹟に就て落歌印章を摹取して上木する所ふり文
化五年戊辰佐藤坦序および凡例九則あり
第一冊　宋元　第二冊　明　第三冊　清

薫薮堂琴譜一卷一冊寫

上古琴論にはしまり彈琴須知におはる書中畫圖四十余品を載たり琴の
ことにおゐて頗る詳悉といふへし

墨子考二卷二冊寫

体裁前の管子考とおなし寛政乙卯九月の自序あり

戸埼允明

呂氏春秋考五卷一冊寫

同

卷端題して補訂讀呂氏春秋といふ体裁上におなし

荻生徂徠

讀呂氏春秋三卷三冊寫

題して徂徠山人外集といふ八より十に至る呂氏中文辭を提出し異同自
說等を漢字もて記せり

桃井源藏

世說新語補考二卷二冊刻

凡百の書より考據とふるへきものを輯錄し世說の章句をかゝけて是を注す
寶曆十一年辛巳後藤世均序同年源藏か撰する所の引あり同十二年
壬午那波師曾及辛巳之冬中村文輔跋あり此書引證の精きよし日本詩
史にも記せり

三家元珉

道德經會元三卷三冊刻

此書ハ元珉その師饗庭氏の説を傳へて著す所の老子の自注にして自家の卓見まゝ見へたり寛文二年壬寅二月自序並凡例あり五年乙巳自跋六年丙午七月貞確子跋あり

老子本義二巻 一冊 刻　　勝　舜政

老子上下篇を合して一冊とふし自注を施すその邵注と標するものハ全く邵辨か注を用ゆその餘ハ自他の説を雜記す又別に某氏の説ふる事を標す

亭保年中金華平玄中序並同十六年三月自序凡例あり又李老忌像漢邊韶撰する所陳國苦縣老子祠碑を載す

老子特解二巻 二冊 刻　　太宰　純

古訓を用ひ諸家舊説によらす特見の註を施すよつて書に名つく天明二年壬寅九月野公臺序並自序年月を記さす壬寅八月宮田明か跋あり

老子妄言二巻 二冊 刻　　豐浦　懷

巻中題して老子道德經妄言といふ則懷か自注ふり天明八年戊申秋八月釋紹岷序同年冬田泰序及みつからの題辭數件を出すまた同年十月若林順積後序同三月門人東金中惟長跋あり

老子正訓附錄問義二巻 一冊 寫　　戸崎　允明

本文章句をかゝけ他説自考を注す家語考左傳考におなし

莊子考四巻 四冊 寫　　同

前の呂氏墨子等の考と同しく諸子の説を擧けて異同を正し自の考を附す

和語陰騭錄一巻 一冊 刻

明袁了凡か書を其まゝ和釋せしものなり安永五年丙申乾重益序に無名老人譯せるよしをいふ同四年乙未津不可説か序讃中二三子跋あり立命之學謙虛利中積善改惡決科要語の目を立惡を改善に移れハ自ら貧賤夭折生付たる命數をも冥々の中にて改め換るといへるなと冥府の事のみを説けり

集類

長谷川　松山

唐宋詩辨一卷一冊刻　　村瀨　季德

自序あり嚴滄浪陸務觀の二氏に因て唐宋の詩の風を辨したる書ふり

續唐宋八大家文讀本十八卷十二冊刻

文政八年檉宇林氏序同二年古賀煜序同年佐藤坦序同八年柴田清堅跋例　言書目等あり此書八沈確士か唐宋八大家讀本の官刻に入て人々珍とすれとも猶遺珠多きをもて季德諸子の選本に就て其遺漏を集めしものふり体沈例確士か讀本に倣ふ凡三百五十三篇

第一卷　第二卷　第三卷　韓退之六十一篇　第四卷　第五卷　柳子厚五十三篇　第六卷　第七卷　第八卷　第九卷　歐陽永叔六十二篇　第十卷　蘇明允二十一篇　第十一卷　第十二卷　第十三卷　第十四卷　蘇子瞻六十八篇　第十五卷　蘇子由二十四篇　第十六卷　第十七卷　曾子固三十四篇　第十八卷　王安石　介甫三十篇

按するにこの書批評ハ皆前賢に出るものにして其名をあらハさす篇後の總評ハ皆名氏を出す毎篇題上の批點あるもの其体例等ハ皆凡例にくハし文政八年の上木

詩仙圖像一卷七冊刻　　石川　丈山

丈山詩仙圖像の序次に蘇武より曾幾にいたるまて三十六詩人の像を圖し其作を頭にかゝけたり

寒山詩集管解七卷七冊刻　　釋　交易

寒山詩の注解なり漢字にて記せり寛文十一年辛亥自序あり第七卷附豐干錄偈五首　拾得錄詩五十八首及ひ二子の傳等を載す寒山豐干拾得唐太宗の時に當て同しく跡を國清等にたれたり是皆佛の化身なるを以て今豐干拾得集を以て寒山詩に併せのする由自序にいへり寛文十二年壬子上木

杜律發揮三卷 三冊 刻　　釋　顯常

杜律一首ごとに題のみをかゝげ詩中或ハ全句或ハ二三字の義を解及證を考たる書ふり文化元年上木浦世讃か序あり

謀野集刪一卷 一冊 刻　　田中良暢

王稱登か尺牘を拔萃して標注を加ふ享保廿年乙卯入江忠固か服元喬序同年藤忠充跋ありこれ良暢沒後其稿を得て梓刻する所なりといふ

弇園摘芳一卷 一冊 刻　　釋　玉宣

玉元美か集中より尺牘を拔萃せしものふり是より先坊間于鱗牘尺を抄出して梓行す于鱗元美一時匹敵の才子故に宣また此書を撰て滄溟尺牘と並行しめ世に公にするよし寛保二年壬戌の自序にいへり

學說

ちよもど草 一卷 一冊 刻　　妙壽院惺窩

天明八年戊申秋八月菱賓か漢字の刻序ありこの書ハ惺窩の母佛教を學ふこゝいへともいまた儒道の要を聞さるをもて惺窩に尋しかハ惺窩則假字もてその大意をのへてその母にいたせし書ふり

舜水朱氏談綺三卷 四冊 刻　　安積覺

舜水朱氏か西山公のためにあらはす所の學宮圖說および懋齋野傳か舜水に質問せる簡牘踐素の式深衣幅巾の制より喪祭の略禮に及ふまてその耳聞する所の事また今井弘濟か舜水にきけるところの事物の名稱を概舉せるものをあつめて校讐する所ふり寶永四年丁亥仲冬自序あり

心喪集語二卷 一冊 寫　　安東守約

守約その師舜水の心喪に在りし時舜水の筆語およひかつて贈答せし書等取あつめて一冊ことふせし書ふり天和二年壬戌の自序あり

鄰嬰俗解一卷 一冊 寫　　室鳩巢

すへて學問の弊をすくひ正學に向ふの術を假名にて志るせり卷末庚戌初

冬駿臺隱士室氏誌焉とあり庚戌八享保十五年なり

中江藤樹

藤樹先生書牘一卷寫一冊

門人にあたへ及その問に答ふる假名文の書牘をあつむ文中を味へハ性理心術の學をすゝむるの意を專らに述たり

三宅尚齋

爲學要說一卷刻一冊

この書學問の要旨を志るす卷首或人問三則を設けまた居敬窮理讀書本領立志等の目を標しすへて當時輕薄浮藻の學をおさへ實學を勤るの法を志ら志む　正徳元年九月の自跋安永六年丁酉合田謙美跋あり

同

歌議錄一卷寫一冊

正徳五年乙未自序あり道体二篇爲學三篇すへて五篇に分ち自家の所見を書つられたる漢字の書なり

佐藤先生語錄一卷刻一冊

佐藤直方か論辨せし經子の說話を門人の筆記せし書にして第一篇は近思錄筆記と題し次に西銘講義と題するもの二篇次に伊川易傳序次に稻葉正義所錄と題しもろ〳〵の說話を雜記し次に迂齋先生語錄抄略を附すこれは別に單行す

佐藤直方學話一卷寫一冊

また直方か學問の說話をあつむ卷首にいふ元祿十三庚辰年同巳年先生會跡部宮內良顧亭僕亦侍因錄良顧丈之所記言と先生は則直方にして僕は記者のみつからいへるなるへし其名を詳にせす

稻葉正義

迂齋先生語錄抄略一卷刻一冊

卷首に題して迂齋先生學話抄略といふ先に正信錄さて迂齋か門人に曉せし學話を集めし書ありこの書かの正信錄の中より抄出せしものにて節ごとに目をかゝけ假名にて記す

中村惕齋

講學筆記三卷三刻一冊

平生その門人朋友との學話をあつめたる筆記ふり寛保三年癸亥閏四月

門人增田謙之の謀つて上木する所同年の序および謙之の門人露木高篤の跋あり

仲子語錄五卷一冊 寫　　増田謙之

この書は其師仲村惕齋に質問せし事あるひは日頃の物かたりふさを國字もて志るしたり

若林子語錄一卷一冊 寫　　蟹養齋

若林進居か物語を門人の筆記せしものふり卷尾享保壬子初冬庚申日記之と云

非徂徠學一卷一冊 刻

荻生茂卿か程朱を非難して自から古學を主張せしを排斥して書たるものなり卷中徂徠著述の書および其言辭をかゝけて一々是を辨論す寶暦十年庚辰訂齋久米順利序同四年甲戌自序及跋明和二年乙酉秋八月上木す

慎思錄六卷六冊 刻　　貝原篤信

篤信曾ておもふ思の學問に於ける其功大ふるを以て凡て思慮に關る事を條舉してまゝ唐土の事を引漢字もて記せり正德三年甲午立春日自序あり閑散餘錄に篤信著述數十部之内道學の見識を述たるは自娛集とこの書と二部にあるよしみえたり

大疑錄二卷二冊 刻　　同

大野通明仙人堂校正して上木す卷首にのする太宰純か讀大疑錄を案するに篤信少より程朱の道を尊信し精を專にし力を竭して是を學ふ事多年ふり晩年書に涉る事廣く學力の稍進に從ひ忽ち程朱二氏の言語先聖の道に異ふるもの有を疑ひ刻苦反復これをおもふに遂に其疑を解する事を得す是に於て其說二萬言をあらハし大疑錄と名づくるよしをいふ明和三年丙戌通明か後序あり○大室國史によれハ大疑錄を好古の作といへりされと閑散余錄にも篤信晩年宋儒を疑ひこの書をあらハせしよしをいふは

しめ篤信道學を信し自娛集愼思錄をあらハし晩年疑を發すいまた一家言を建つるに及ハすわつかに此書にとゝまる篤信か生涯の見識ハ此書にありとゝるへし

仁齋日札一卷 一冊 寫　　伊藤仁齋

大抵學業の事に及へる漢字の記にしてまゝ宋儒の事に及へり卷尾極論及讀近思錄鈔を附す

古今學變三卷 三冊 刻　　伊藤東涯

享保七年壬寅四月の自序にいふ其父二千餘年の教法を看破して復古の記を發す其遺言を繼て唐虞以來宋明に至る學問教法の異同をついて其變を著すといふ延享改元奥田士亨後序あり○按するに東涯か著述の中この書殊におもしろく委細に書をさはきたるものなりと或人稱美せしよし湯淺元禎か文會雜記にみえたり

古學指要二卷 二冊 刻　　同

父仁齋の緒論をひろめし書ふり

上卷　古學原論におこり心就已發言說に終十一條○下卷　人物聖凡異同說におこり心法道法論に終十五條　正德四年甲午臘月の自序あり享保己亥上木

徂徠學則問答一卷 一冊 刻

題して徂徠學則附錄問答といふ郡山の谷元淡か徂徠學則中疑しき所を條件して問たるに徂徠其傍に細書して答へし書牘なり又徂徠の復書あり享保十三年戊申とあり同年柳里恭序あり按するに管子學則及ひ宋儒の學則皆學習の法を示す準繩を備へて儀論に及ハす徂徠の學則に於てハ縷々たる議論紛々たる誹謗學則の字に當らす句々唐宋を免れすして自負の古文辭に叶ハさるよし蠻養齋か非徂徠學に見えたり

匡正錄一卷 一冊 刻　　井上純卿

安永五年丙申篠本廉序ありこの書の大致學問の流弊をすくふにあり凡

四十余條みな漢字にて志るす

集義和書顯非 二卷 二冊刻　　西川季格

熊澤了介かあらハせし集義和書の非を季格か糺せしものなり元祿四年三月の自序にいふ中師の學脉に背たる論說又王陽明の語を拆きたる說又四書の語を解くに古人の本註理の明白なるものを改めて己か自知よりいひ出す新語を拾舉て其非を論辨し小書二卷を作て集義和書顯非と號す顯非とハ其非を顯ハすなりといへり了介も藤樹か門人にてもとより季格とハ同門ふり

王學辨集 一卷 一冊刻　　豐田信貞

宋の陸象山明の王陽明の二子共にその學聖賢にもとり弊禪學の藩籬に出すされと陸象山ハ朱子と同時にして其說行ハれすひとり王陽明朱子におくれ邪說をほしいまゝにす故に後世諸儒これを憂へ辨斥するもの少ふからす又本邦の士も論辨して雜著筆記に載するものあり此書ハその說を集

錄して王學に惑ひし人をひらくためにつくりし書ふり正德 乙未佐藤直方序同壬辰自序同癸巳山中剛勝跋あり

學論二 卷 二冊刻　　松宮俊仍

本邦上古より近世に至るまて學風の變を辨したる書にて漢字もて志るせり間々國初以來文華の盛を述べ又日用名義稱呼を辨するものを載す及近代諸儒異學の說をあけて是を辨說せるものあり寶曆 五年 乙亥季春自叙及ひ同年中條信敬跋あり

學論二編二卷 二冊刻　　同

書体本編におなし寶曆六年丙子孟春自叙 七年丁丑 九月門人長島安直跋あり卷末俊仍子俊英か墓誌を附す俊英字子僑麟亭と號す父に先て歿す

授業編十卷 五冊刻　　江村綬

此書讀書學問の仕方より作詩屬文の心得その餘訓點四聲姓名字號

等の心得にいたるまてを志るせり 天明三年癸卯二月東都朱鳳序同年河内北山彰序天明元年辛丑自序ありこの本天明三年五月上木後の十卷嗣刻すへきよしいへり

名詮二卷典詮一卷三冊刻　龍公美

名詮ハ道德仁義等の義理を辨し五行學にいたる典詮ハ詩書易春秋禮樂等の事を論すすへて漢字の記ふり安永四年乙未男世華序門人石井元彫序及摠目あり同年八月平信好跋同三年甲午門人蓋九齡跋同年門人東光和跋同四年乙未公美か次子世文か跋あり

時學鍼焫二卷二冊刻　高志養浩

延享四年丁卯友箭懋績序同年本城嘉曽序同年河合逢原跋あり記者養浩はしめ仁齋の門にして後獨立して學を嗜むこの書ハ時の學者の弊をのへたるものにして仁齋東涯物徂徠の說を排擊するもの多し上卷ハ學術變更を題し唐山より我邦の今にいたるまて講學の變り行さまを論す下卷ハ雜論ふりすへて漢文

秋風錄三卷三冊刻　藤野春

寶曆十年戊辰冬鈴木獨清か序同十二年壬子源朝熙か跋あり物徂徠の答問書の可否を辨したる書ふり獨清序にいふ洛に木槿先生なるものあり今ハすふちなしその人とふりや氣を尚ひ義を重し陽明王氏の學を以て一時に鳴る旁ら釋老においても意我あり後ふし齡八旬に垂さして尚人なおしへて倦す從遊の徒たま〳〵茂卿か答問書を袖にし來てその可否を問ふ先生素より爭ふ心ふけれとも已を得すして世教に害あるものを舉てこれを闢く遂に一小冊子とふることこれを秋風錄といふものハ撰書の時をもつて名つくるふりと云々第三卷を附贊とふす此一卷ハ獨清か撰するところにして是亦時學に砭針する確論ふりと朝熙か跋に見へたり

學問源流一卷一冊刻　那波師曽

師曽か沒後其弟奥田元繼嗣子與藏と相謀て上木する所上延喜天曆の

いにしへより延享寶暦以來當時に至るまで文獻の隆に開けて世と共に流れ移るさまを評して其間學風の邪正得失を斷したる假字の記ふりみつから巻尾に記していふ予今年虐疾をうけ間にあふて門人諸子の過問を辱ふす因て時々學風の世に隨つて推移し又士習に汚隆ある事を語るに就て終に小冊に寫して子孫の書を讀むものに諷するのみといへり寛政六年甲寅夏五月元繼か序あり

學政或問一巻 一冊 寫　　辛島憲

憲か口語を門人の筆記したるなり文化丙子假字の自序にいふ一日客來て對話の序國學教化の行れさる事に及ふ憲その職に任するを以て其身に於て藥石のことしされとも古今の俗ことなれハ教化の法また宜に志たかふへしよつて一二陳説する所を門人等記しおけるといへり大抵人材を教育するの法をいふ

志學階梯二巻 二冊 寫　　末包文事

この書もと題して志學訓と云通篇假字文にして凡學問の道人々ふさてかなハさるを志り道に向ふの志を立しむ上巻君臣父子の道略その大綱を志めし下巻ハ近代親しく聞見する所明君賢臣烈婦孝子の事蹟を志るし末に諸名家著述の記序文章等を附し祭酒林氏の家系履歴等をしるす

海亭夕話一巻 一冊 刻　　大澤某

自序および稲垣長章序和氣成美か跋ありすへて一章ことに學問の仕方を志るしたる書ふり長章か序に云大澤先生二三の弟子を率て芝浦の海亭に遊ひ淹留數日弟子その間を窺ひ相會して講習討論し斷を先生に取りてその説を錄し名つけて海亭夕話といふ又嘗て童蒙の益を請ふに應する數章を巻末に附載して門人に授くといへり奥書の末安永乙未夏六月と記す附錄の末又奥書あり

明清雜著

朝鮮紀事一卷 一冊 寫　倪謙

謙かつて朝鮮に使する時の紀行にして景泰元年庚午（寶德二年）正月丁丑朔遼東起程口筆をはしめ閏正月戊寅鴨綠江にいたるに終る日々經歷の路次送迎應接投宿等の事を志るせり

譯語一卷 日詢手鏡一卷 一冊 寫

譯語八岷峨山人撰する所韃靼摠國の山川土産民情土俗等のあらましを志るす

日詢手鏡八王濟撰濟白鐵道人と號す吳興の人嘉靖改元壬子（大永二年）濟か輿書を按るに濟廣西橫州に官たる時郡内の山川土産民情土俗のあらましを志るしたる由見ゆ卷端標題の上に君子堂の三字を冠す君子堂八すなはち郡の側にある燕息の處なりとそ

强識略抄撮殘缺六卷 一冊 寫　吳國賢

萬曆十七年己丑（天正十七年）冬十月汝南陳元勳梓行する處ふり全部四十卷經傳百家に本づき天文地理の事より萬事萬物にいたる迄を抄出し門目を分て簡約にあつめし書なりこの書今ある所二十五卷居處部二十六卷飲食部二十九卷寶珍部三十卷花木部三十一卷鳥獸部僅に六卷のみ

古今奇文品勝 一卷 一冊 寫　孔貞運

天啓二年壬戌（元和二年）陽月長洲文震孟か叙あり此書周末秦漢より以降明に至るまての奇文六十二篇を集め志るせりその奇文といへども人口に膾炙するものハ略せるよしをいふ

明辨類函十五卷 三冊 寫　詹景鳳

鐘伯敬校訂する處ふり崇禎五年壬申（寛永九年）張溥序及論例五則を出すへて天人の道理を辨せし書にして作者辨造化辨人道辨人品辨等の目あり原六十四卷たる事目錄に著せり今ここに收る處は二十三卷人道

辨明自編　二十六卷同　三十六卷同適自篇　三十七卷同　三十八卷同　三十九卷同　四十卷同　四十一卷同　四十二卷同　四十三卷同　五十五卷人品辨辨賛志統　五十六卷同　五十八卷同　五十九卷同　六十卷同すへて十五卷に過す

昇菴詩話一卷一冊寫

陳元贇か詩話を山邊松校輯する所凡六十六件松か父某元贇と交を結ひ親しく講問せし詩話をあつめて一冊とするよし元禄四年辛未九月松か自跋に見えたり

石成金

惺齋四種四卷一冊寫

童禮知要一卷　常禮須知一卷　坐位圖注一卷　發答心言一卷卷ごとに自序及目錄ありこの四種八天基か全集傳家法集といへる書にも載せさる處なりといへり

呂君翰

歷代事蹟圖一鋪刻

この圖八唐山域内の全圖にして各所古今の事蹟を志るし及ひ圖法に南北兩京十三省の圖考を附せり寛延三年庚午江戸に刻する所ふり題して歷代分野之圖古今人物事蹟といふ

周南

其慎集五卷一冊刻

此書八周南か醫療する處の人物病症を舉てその藥劑の加減効驗の靈應死生を議別する等の事及問答數條を設けて難症療治の法ふさを說けり享保十六年辛亥長崎平君舒序同年源昌言序門人城門章序及自序凡例を載せ享保十八年癸丑郡山藩侍醫橋正瞭か跋をのせり

曹元宰

奇方錄一卷一冊寫

この書も諸病の治法を雜記したる書ふり天明二年壬寅秋九月薩州の侍醫郡山貞倫の奥書にいふ右數方乾隆三十一年清人曹元宰本藩の部内南海の地に漂着して南人にさつくる處の方ふりその一本を得て謄寫して家に藏すと云々卷末亦外療家傳方を附載す

忠臣庫十卷 三冊 刻

乾隆五十九年甲寅の寛政六年題辭にいふ鴻濛子嘗て市を閲して奇書を獲る題して忠臣庫といふ是を披けハ則稗史の筆蹟にして海外報讐の事を錄すおもふに好事家異域俳優の戯書を譯せしふり惜哉その文鄙俚錯誤よむへからさるものあり是をもつて卓老水滸の跡を追ひ潤色訂補してもつて遊宴の譚柄に備るのみと云々是より先俳優淺野氏義士の事を扮すその院本ハ近松信盛か編する所目して假名手本忠臣庫といふ國士四十六を以て義士の數に配す此本文又是を漢譯せるものふり國字の旁訓ハ懶所か附する處たゝし此本諸葛蠡訂正して剞劂に附す

鴻濛 陳人

徐而庵詩話 一卷 一冊 刻

梁燁か跋あり文化二年丁丑翻刻する所同年葛質か序あり云宋明以來騷客膚淺の見るへきの詩話ふしたゝ清人金聖歎徐而斧のみ唐詩を論する其言極てよろしよつてまつ此本を旁譯して上木すといふ

徐 增

經傳正誤 一卷 一冊 寫

此書經傳の音訓をたゝせるものにして易十六條書十四條詩十六條禮記三十二條左傳二十九條公穀傳二卷爾雅六條を解せり

對相四言雜字 一卷 一冊 韓刻

卷首に洪武四年辛亥孟秋吉日金陵王氏勤有書堂新刊と志るせりこの書ハ古詩の体にふらす四言の韵語をもちひて日用の雜字若干をあつめ夫に字ごとの形象を畫かき字畫二行に併行す童蒙に便有へき書ふり

對相四言 一卷 一冊 唐刻

前と同し卷首に吳門聖德堂梓と志るせり

對相四言 一卷 一冊 唐刻

前とおなし亦聖德堂梓卷尾に官板出像と題す

雜字零篇 一冊 唐刻

贈答書簡の式法日用の字義俗語百家姓千字文歴科狀元等の事ふと各部類をわかち志るして童蒙に便ふらしむ巻端雜字本巻之四と標せるをみれハこれその零本なるへし

合刻神童詩百家姓對相四言千文千家詩五種 一冊 唐刻

神童詩五言絶句四十四首皆童蒙に諭すへき卑近の事をつゝれり

百家姓八一姓ごとに地名六律を配置す

對相四言前の出像のものと全おなし

千文間々注解を首格にあく

千家詩上　に高蟾秦少游黄庭堅等か咏格詩をのせその間下格の千家詩の景狀を圖出せり

解注和韻千家詩選 二巻 一冊 唐刻

臨川湯海君か校釋にして書林文華軒梓行する所ふりすへて唐宋以下諸名家の詩を春夏秋冬に分ち注釋を加へ又頭書に詩ごとの和韻をのせ又そ

の詩の景色を畫圖にあらハしたる書にして上巻ハ七絶八十三首下巻ハ七律三十八首を舉たり

天命圖說 一巻 一冊 刻　　李滉

朝鮮もと天命圖あり鄭秋巒か作ふり此國ハ退溪鄭圖を刪定して作る所圖說十節及後叙あり嘉靖三十三年甲寅（天文二十三年）鄭秋巒序あり元和七年辛酉羅山林子の跋にいふ我家久しく此本を藏す一日惺齋に眎す惺齋云四端出於理七情出於氣此說是也因知記に比すれハかれよりまされりといへりとみゆ慶安四年辛卯翻刻

江關筆談 一巻 一冊 寫　　趙泰億

正德元年泰億江戸に滯留之日副使任守幹從事李邦彦等と新井君美に客館に會せし時之筆語にして泰億か記しおける處ふり

番外雜書解題卷之十七 大尾

皇朝事苑 四冊　南山巡狩錄 九冊　假名貞觀政要 五冊　經名考 一冊
讀荀子　騎法便覽 五冊　樂家錄 五十冊　和漢武家名數 五冊　本朝鍛
冶考 十二冊　刀劍或問 四冊　北邊隨筆 四冊　止戈正要 一冊　軍法功
者書 一冊　戰功記 一冊　淇園文集 初集　詩聖堂詩集 三冊　寂照堂谷
響集 十冊　金華集刪 四冊　長門戊辰問槎 三冊　善隣風雅後篇 二冊
春川詩草 三冊　遠碧軒記 四冊　濟生寶 一冊　普救類方 十二冊　小兒
育草　牛山活套　百花種藝錄 七冊　中菊作法 一冊　菊經 一冊　菜譜
一冊

以上の書籍はいつれも官事にかゝうらひて時に庫中にあらされハ私にみること
を得す故にその書體を辨しかたし後來新收の書に合して續篇に補入す
へきものなり

書雜書解題後

明成祖嘗命姚廣孝纂集天下之書籍。以韻爲類。永樂大典是也。清高宗重命詞臣校勘之。並蒐輯遺書。彙爲四庫全書矣。方今昌平學館。又纂集清韓及國人著書。遵依四庫條目。藏弆之。韓書以其國小。而其書亦少。未分之條目也。國則自有神書帝紀公事政要官位家記軍記系譜武家文筆和歌和文物語管絃釋家雜抄附錄十七部。及地誌記錄雜書。三項分置焉。蓋地誌記錄雜書今見爲修誌備用之書。故特別其項云。而地誌記錄。肆各自分之條目。而雜書獨未分條。殆煩於稽覽焉。夫以明清之大。纂集天下之書籍。而大典不過二萬二千二百一十一卷。全書不過三千四百六十種七萬五千八百五十四卷。猶且以其煩於稽覽。故別輯簡明目錄。以置翰林院內。今官庫所纂集。肆未至以告竣。而其所得既出明清之右。我文獻之盛。於是乎可徵也。祭酒林公欲倣簡明目錄。輯國書解題。乃設纂修員。以閒官君考叔爲總裁。以綜其成。戶

田君孟潤。中里仲舒。及量令爲五人。五年而地誌解題告成。各仰遂恩賚。尋亦輯記錄解題。將以及神書以下之書。吁亦盛哉。嚮孟潤欲以退食之餘暇。私輯雜書解題。然而其所得至千三百餘種六千三百餘卷。其浩瀚繁夥。殆非一人之餘暇所可能竣。乃使仲舒及量令羽翼之。今茲丙戌稿初脫。故創業之功。孟潤之力居多。而至其羽翼之輔佐之則仲舒量令。亦與云爾。

文政丙戌季秋下浣

村井量令識

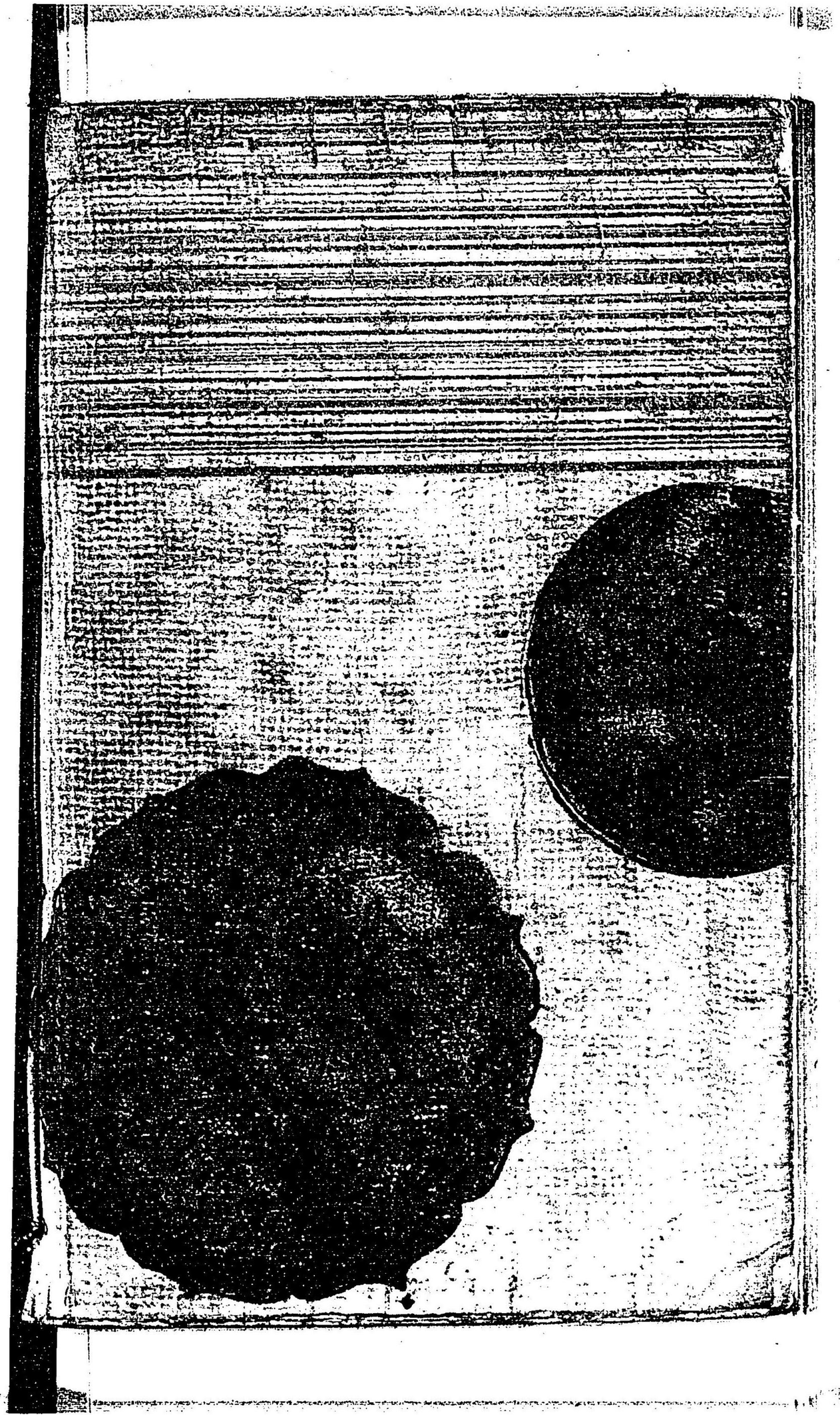
69
50

明治二十七年三月六日印刷
明治二十七年三月九日發行

定價金十五錢

編集者　近藤瓶城　東京市小石川區指ヶ谷町七番地

發行兼印刷者　近藤土造　東京市麹町區飯田町五丁目二十六番地

發行所　近藤活版所　東京市麹町區飯田町五丁目二十六番地

版權所有